

美術の学習活動における思考力の捉えと実践

美術科 西澤 明

1. テーマ設定の理由

本校の平成 21 年度からの学校研究は、平成 24 年度より完全実施になった現学習指導要領に沿った研究テーマを設定し、各教科で研究実践を行ってきた。各年度のテーマの概要は、平成 21 年度は「習得・活用を意図した学習活動について」、平成 22 年度は「言語の能力の育成を説明（伝え合う言語活動）で行う学習活動について」、平成 23 年度は「教科の学習目標の実現を言語活動とその評価を通して行う学習活動について」、平成 24 年度は「言語活動を通して思考力を育む学習活動について」、そして平成 25 年度は、「課題を解決するためのよりよい思考を実現する学習活動について」をテーマに、「思考の型」と「思考の手立て」のキーワードで実践研究を行ってきた。

一連の学校研究のテーマは密接につながったものであり、現学習指導要領で求められている課題を整理、理解し、これまで行われてきている教科の学習活動および指導を、課題の実現を意図した視点やキーワードで捉え直すものである。それを受け、美術科では「求められている課題の整理、理解」と、「これまでに行われてきている教材の、課題の視点による見直し」の二つを柱に据え、研究を行ってきている。その際、研究実践の対象とする教材については、次年度以降の授業に研究成果が活かせることを重視し、研究のための新たな教材を開発するのではなく、既存の教材を対象としている。

平成 25 年度の学校研究のテーマである「課題を解決するための思考のあり方」と、副題の「よりよく思考するための手立ての工夫」は、平成 24 年度のテーマ「思考力を育む指導と評価 ～言語活動を通して」の延長と捉えられる。そこで美術科の研究テーマについても、平成 24 年度のテーマ「学習活動における思考力の具体化」の延長として、「学習活動における思考力の捉えと実践」とした。

2. 課題を解決するための思考のあり方について

(1) 実践研究の対象とする学習活動について

学習活動における「課題を解決するためのよりよい思考」は、教科の目標である「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」、教科の評価規準である「関心・意欲・態度、発想・構想の能力、創造的な技能、鑑賞の能力」の育成を基本に、その実現を図るものでなければならない。実践研究の対象とする学習活動については、平成 24 年度の研究を踏まえ、以下のような点に留意して設定した。

① 対象とする教材について

平成 25 年度の実践研究の対象については、平成 24 年度の研究で取り上げた単元「鉛筆で表現する心の世界」における「鉛筆の基礎的・基本的な知識・技能を用いた表現活動」教材を継続して取り上げることにし、学習活動・指導に求められている課題の位置づけやつながりの明確化と、教材の完成度の向上を図ることをめざしている。

② 教科の目標との関わりについて

教科の目標から「豊かな感性の育成」に焦点を当て、「思考力の育成」を、鉛筆の表現効果からイメージを受け取る「感じ取る感性」と、表現効果を活用して制作意図のイメージを可視化する「表現する感性」の二つの感性と結びつけて、学習活動・指導を考える。

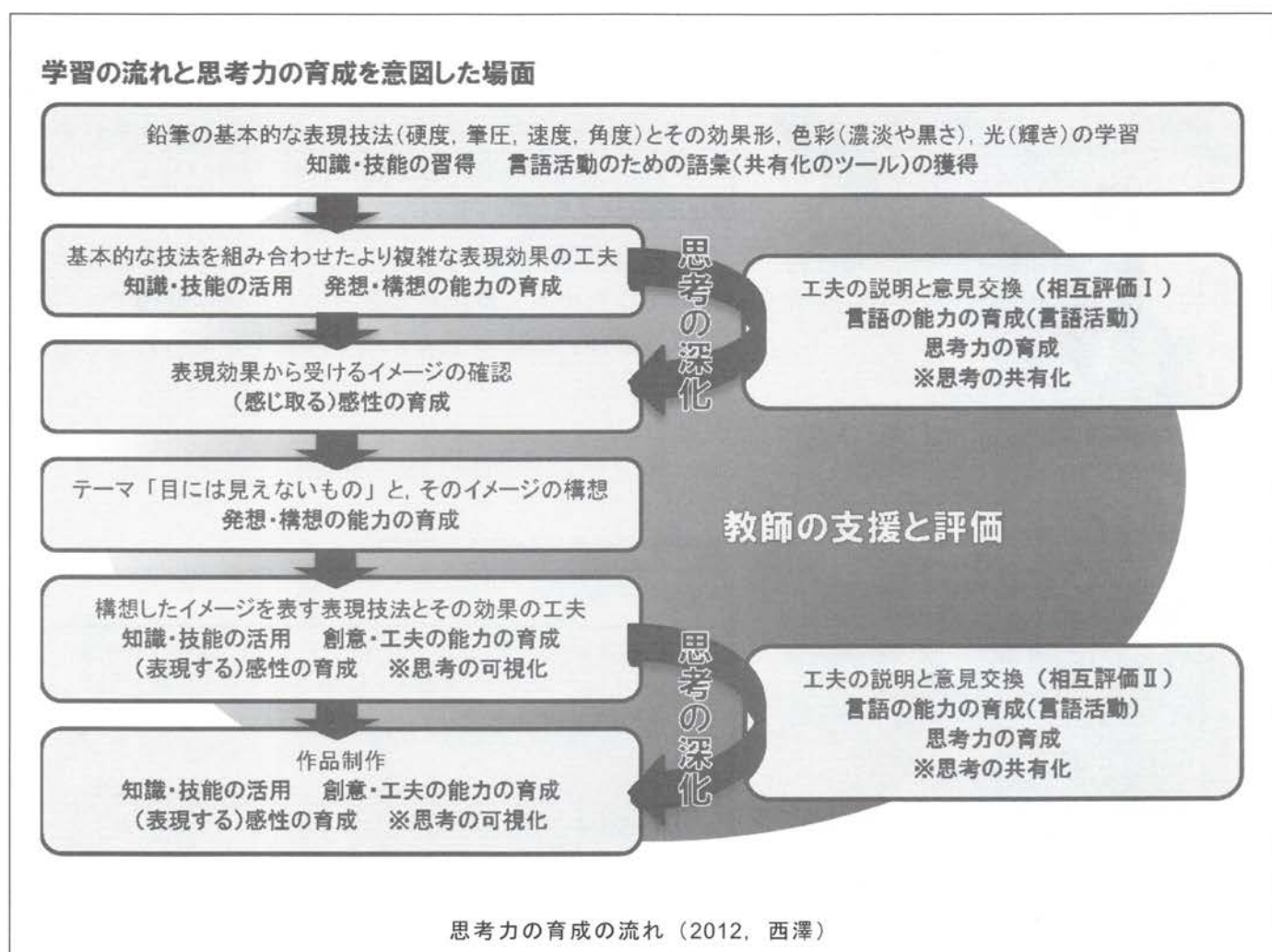
③ 言語活動との関わりについて

学習活動の中で、自分の考えを友人と意見交換したり、自分の考えを説明したりする際には、事前に学んだ鉛筆の基本的技法の用語を使わせることで、会話の深まりをねらった。

④ 課題の設定について

思考力の育成を図る場面を次の3つに設定し、それぞれの場面における活動がそのまま生徒にとっての課題となるように位置づけた。

- 鉛筆の表現効果を生み出す技法を組み合わせ、より複雑な効果を発想、構想する。
- 意図するテーマやイメージを、鉛筆の表現効果と結び付けて可視化する。
- 意図したテーマやイメージから離れ、新たなテーマやイメージを感じる。



(2) 思考の型について

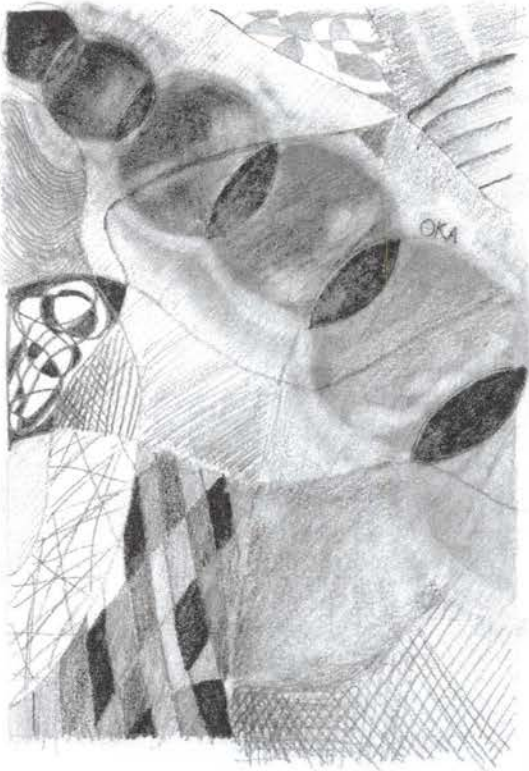
対象とした教材で焦点を当てる「思考の型」については、「目に見えないもの」という制作のテーマを、学習した鉛筆の基本的技法と表現効果から受けるイメージと“結び付ける”こと、“組み合わせる”こと、自身の意図する表現によりふさわしい表現効果を“選択する”こと、抽象的な自分の感じたことや表現したいことを具体的な言葉に“置き換える”ことと捉えている。

(3) よりよく思考するための手立てについて

“結びつける”, “組み合わせる”, “選択する”, “置き換える”といった思考の型をよりよく実現するための思考の手立てとしては、「制作途中に考えたことを画面の余白に書き留める」指示を出し、常

に自分の思考の流れや変化について整頓し、確認できるようにした。その際、既習の鉛筆の基本的技法をまとめた資料を参考にすることで、より思考の深化が見とれると考えた。

3. 実践



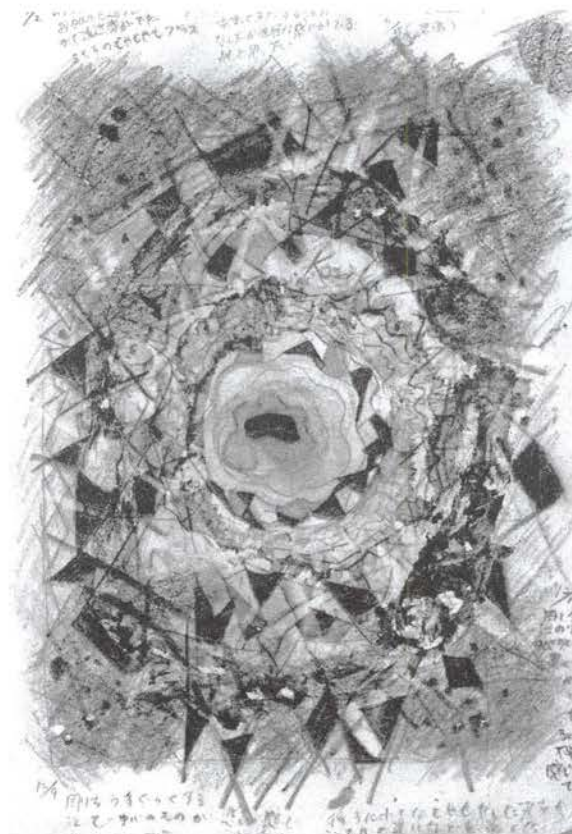
鉛筆の技法と表現効果による作品制作「目に見えないもの」作品説明

作品のテーマ(タイトル) しやほん玉の音

目に見えない「音」を描きました。しやほん玉は目に見えるけど、音は見えないので、聞こえてきそうないろいろな音を、線の濃さ、透さ、数などを変えたり、二つたりあとをつたりに表しました。特に、線の濃さと透さは工夫して濃い線、薄い線、遠い線、ゆくりの線などいろいろな線をかきました。

初めは、「風」と「しやほん玉」というテーマから始めましたが、描いていくうちに音が見えてきて、「音」というテーマに変わりました。テーマが変わるからは、自分の思いに近づくために、二つたりすることも取り入れて、線を描いたあとの工夫もできたと思うのでよかったです。真まは線と曲がった線、中の色、細い線と太い線それぞれから感じる感情があるので、それをたくさん使った作品をつくりました。音にも小さい音や大きい音などいろいろな音で、感情を重ね合わせながら、伝わたらいいと思います。

意図する表現の実現のために、鉛筆の基本的技法をまとめた用語を使って解説ができています。途中経過で、「感じ取る感性」によってイメージの変化があったこともわかる。

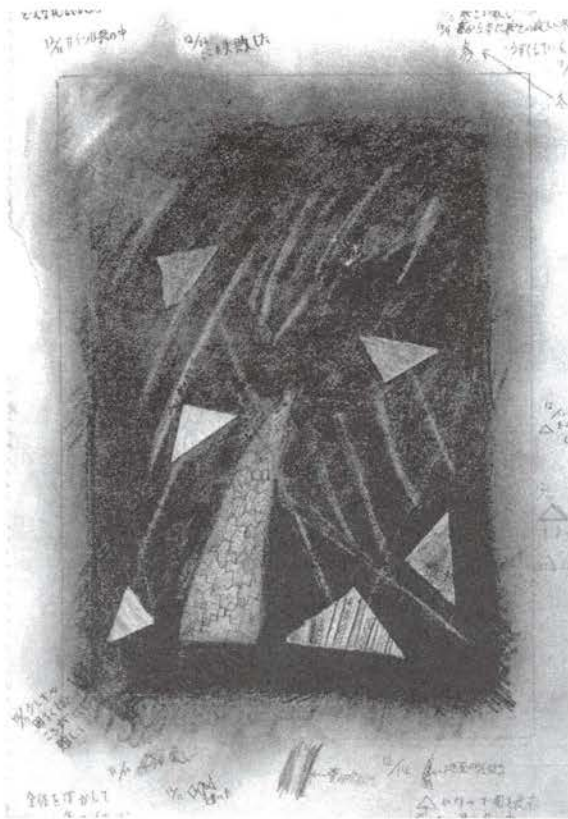


鉛筆の技法と表現効果による作品制作「目に見えないもの」作品説明

作品のテーマ(タイトル) 「助け」という悲鳴

まず私のテーマの「悲鳴」には「恐さや悲しみ、迷い」などの気持ちがあると思っ、それを表現しようとかんがえました。迷いを表現するために中心に2HやHBで力を弱くふたふたとした円をかきました。そして恐さは恐いからその必死さを表すために2Bや6Bで力を入れて勢いよく方向のちがう線を、太くかき乱れ、できるわけ曲線にならないように直線がかくふたふた。悲しみは一人残り残されているという悲しみを表したかったので、中心を強調しそれを自分として周りは2Bを横にわかせゆくりとかき自分の周りの冷たさを表現ほした。そして中心を強調するためにものをぬり手で外側に向かてこすりました。

明確な表現の意図を、具体的な表現技法とその効果を使って実現しようとしている様子が見える。“結びつける”、“組み合わせる”といった思考が高度に行われている様子がわかる。

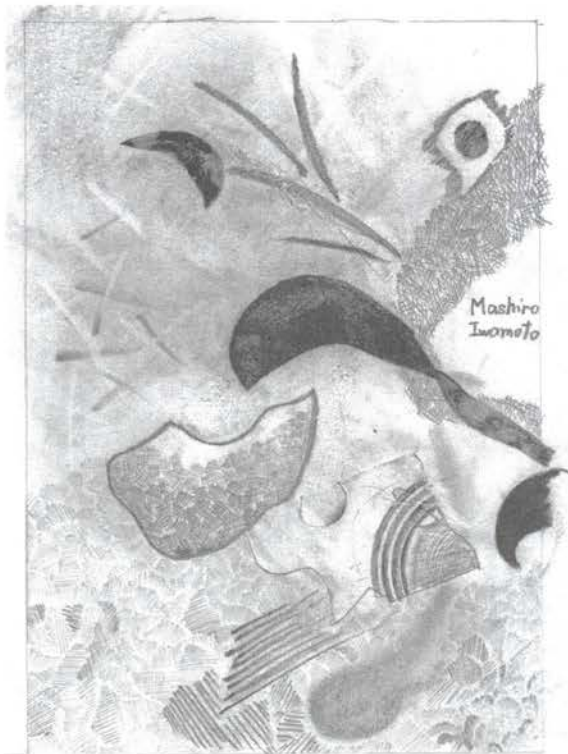


鉛筆の技法と表現効果による作品制作「目に見えないもの」作品説明

作品のテーマ(タイトル) 春から冬に寒さの厳しい冬

私は、目に見えないものを見えるようにするために、明暗を意識したり、水で木の気持ちを細かく表現しました。そのため、ぼかしたり、濃い鉛筆で濃くぬったり、練り消しゴムでふたいて消したりしました。また、細かい所は長く線をかいたり、短い線をかいたり、速く線をかいたり、線の間を詰まらしたりなどのさまざまな表現を使い、たくさんの感情がある感じも出しました。これらの表現を使ったことで、切れた三角であらわした冬の厳しさの中の冬の姿や、大きな三角で表した地面の気持ち、春への希望を表した明暗を、細かくたくさんかいて表しました。制作を進め途中で、冬だりの考えから、厳しさを冬の寒さへの希望をテーマにすれば、見えてくるようになったために、厳しい寒さで春への作風通しを感じたからです。

「活動途中の考えを忘れないように作品の周囲に書き留める」という指示がわかりやすい作品例。書かれた自分自身の考えが、次の表現に結びついている様子が見える。



鉛筆の技法と表現効果による作品制作「目に見えないもの」作品説明

作品のテーマ(タイトル) 海

・海に差し込む光を表現するために、画用紙の中に、暗い部分と白い部分、細かい部分とあらい部分など対照的な部分を作りました。海の中にはいろいろなものがあるので、紙の真ん中に、筆圧を濃くして形を作りました。初めは「風」をイメージして描いていましたが、軽い感じがしなかつたので「方向」をイメージして描きました。ところがあまり線にも方向性が感じられなかつたので、テーマを変えて、「海」になりました。紙を貼った部分には、海の中のものや、海の中のものをイメージしました。「風」「方向」の2つの答えは、「海」というテーマの中でも、けっこう重なる役割を果たしていたので、良かったと思います。

初めは「風」をイメージして制作を進めていたが、途中の作品から受け取ったイメージから、テーマそのものが「海」に変更になった。「感じ取る感性」と「表現する感性」が相互に働いている思考の様子が見える。

4. 成果と今後の課題

共通に学習した用語を使いながら説明し合うことで説明が理解しやすくなり、複雑な表現効果を創り出す他者の方法を自分でも再現しやすくなったようだ。完成した作品を見る限り、考える場面を意図的に設けることで、作品の質は大きく向上するように思われる。今後の課題としては、思考の深化を見取るための評価規準を明確にすることが必要になると考えられる。